

那須塩原市議会 「敬清会」 行政視察報告書



視察期間：令和２年１０月２７日（火）～１０月２８日（水）

- I 視察日：１０月２７日（火）
視察地：石川県河北郡津幡町 ペザン農園にて
内 容：「農福連携の取り組み」について

- II 視察日：１０月２８日（水）
視察地：富山県立山町 立山町役場にて
内 容：「立山ブランド海外展開戦略施設の活用」について

- III 視察日：１０月２８日（水）
視察地：富山県立山町 グリーンパーク吉峰にて
内 容：「グリーンツーリズムの取り組み」について

参加議員： 相馬 義一 玉野 宏 平山 武

石川県河北郡津幡町

・「農福連携の取り組み」について

視察地 ペザン農園

視察日 令和2年10月27日

農福連携とは、担い手の高齢化と減少が進む農業分野と障がい者や高齢者の働く場の確保を求める福祉分野の連携を言います。

この度、2015年より農福連携に取り組んでいるハーブ農園ペザンを視察してきた。ペザンは2001年設立当初から農福連携を掲げつつ「より豊かに、より幸せに」を提唱し、ハーブとの出会いで少しでも生活を豊かにし、少しでも人生を幸せにしたいとの思いで事業展開していて、農業や肥料に頼らずに面積2.2haに50種類以上のハーブを栽培しています。ハーブ栽培を選択したのは多年草で刺し芽で増やせるので比較的成本がかからない。収穫は1年目から3年がピーク。3～5年で枯れる。さらに、茎は棒茶として利用でき肥料等をいれずにすむ。北陸という土地は決して条件が良くないが故に、加工する商品として考えるの選択であるという説明を受けました。

ペザンは障害者支援施設つばさ、就労継続支援B型事業所リハスファームとの交流がある。農作業は普段の生活の中での動きの延長、例えば基本的な生活の中でのご飯は左右どちらの手で食べるかの行動からどのような作業が出来るか判断できるし、障がい者の性格をみながら農作業とのマッチングを図り、その傾向から作物を選定し栽培の指導を行う。ハーブ栽培では作業は必ず土を耕す人、種を蒔く人、収穫する人、計量する人、数量の把握をする人などグループ分けをする。朝礼で、その日の作業の打ち合わせを綿密に行う。どんな人でも1つはできることがあることを念頭に置いておくことが大切であると同時に障がい者として甘やかしてはいけないなど、十二分に配慮が必要であることの大切さを感じた。

現在は2017年に法人化しており、農福連携・自然栽培に取り組み、国連が掲げたSDGS17ゴール・169のターゲットのうち6ゴールを達成している。

1.すべての人に健康と福祉を

農福連携により障がい者の就労支援、自然栽培で美しい、健康的な食材の提供

2.人や国の不平等をなくそう

ジョブコーチ（障害のある人が働きやすい環境を作り）支援を通して年齢・性別・人種・障害の有無にかかわらず生きるために必要な体力をつけ作業を効率よく行えるサポートをしている。

3.住み続けられるまちづくり

耕作放棄地や継続が困難になった農家をサポートし、引き継いでいくことで障がい者が働く場を増し、また収穫体験やイベントを開催し地域とのコミュニケーションをとることで良好なつながりを支援。

4.つかう責任

農薬や肥料を使わない自然栽培により持続可能な農地利用を達成。

5.陸の豊かさを守ろう

農地に農薬や化学肥料を使用しないことで多くの生き物が共存できる生態系に配慮し、持続可能な環境を作っている。

6.平和と公正をすべての人に

障がい者を配慮しながらも不要に依存させることなく、障がい者自らが権利を守るための適切な主張が出来るよう、支援者・障がい者双方の意識啓発に取り組む。

以上のことからつばさ・リハスファームとの連携もより強固になり製品の加工がよりスムーズになった。商品の加工はフリーズドライの専門業者、北国フードに依頼している。フリーズドライすることにより、味も香りもよく、茶葉の量が3分の1になり、利益が増大した。販路は、ホテル・旅館・レストラン（料理の原材料等）・オリジナルパッケージにと開発を進めている。今後は栽培指導・職務内容設定・障がい者のかかわり方の助言・体調や生活リズムの管理などを進める考えと聞いた。将来も安心して障がい者・高齢者・ニート引きこもり・シングルマザー・触法者も働ける場になったことを感じ取れ今後の参考になりました。

農福連携は人が地域の宝になることだった。



富山県立山町

・「立山ブランド海外展開戦略施設の活用」について

視察地 立山町役場

視察日 令和 2 年 10 月 28 日

立山町役場を訪問し、議長内山昭氏、副議長村上紀義氏、局長表寺昌子氏（富山県は女性の議会事務局長が多いとのこと）同佐伯朋子氏の挨拶を受けた。

質問事項

1. 人口・年齢構成の年次推移について
2. 産業別人口比と推移について
3. 海外展開戦略施設の活用と施設周辺地域住民・町・県、業務関係者の（海外バイヤーを含め）期待はどのようなものか
4. 同施設の使用料が決定される背景と年間使用料はいくらか。

内山議長より人口 26,000 人弱で年々減少傾向にあること。富山市まで車で 20 分～30 分、立山中部山岳に年間 100 万人観光客が訪れているが、立山町に立ち寄ることが少ないことが悩みであるとのこと。質問については、企画政策課、米谷課長補佐よりお答えいただいた。

質問 1.2 については統計立山国勢調査により図式化された年齢区分別人口、人口ピラミッド農家数の推移、産業別就労者数の推移について説明を受け、後継者がいないことが問題となっていると結ばれた。

質問 3 については高級シャンパン「ドン・ペリニヨン」の醸造最高責任者を務めたリシャール・ジェフロア氏が率いる日本酒メーカー白岩の醸造場で作られる日本酒の貯蔵庫であり、白岩醸造に似せた造りで

設画監修は、同醸造場を設計されたのは、建築家の隅研吾氏である。2 階建ての建物で 1 階は貯蔵庫であり今年 7 月に完成。8 月に引き渡しを受けた。来年 1 月より隣地に建設中の白岩酒造に 15 年間貸し付けを行うとのこと。周辺地の酒米は白岩酒造で全量買い取りになります。建築費は 5 億 7 千 2 百万円、1/2 は地方創生の補助金、残りは町起債で 2 億 1 千万円、この分を 15 年の貸付代金としており、15 年後は再貸付もしくは売買、無償化するかを検討するとのこと。この施設には、隣地、白岩醸造でつくられる日本酒、720m 1 12 万本を貯蔵できる。ジェフロア氏は、酒造りは地域のコミュニティの一部になることがもっとも大事、立山の地に調和し、これまでにない新たな日本酒を創造していきたいと話されている。

北日本新聞 19 年 11 月 7 日、ジェフロア氏「人をつなぐ酒目指す」を添付します。



立山町を拠点に酒造りに挑むフランスの著名醸造家、リシャル・ジェフロワ氏が6日、北日本新聞のインタビューに応じ、日本酒に寄せる思いや世界展開への抱負を語った。

【関連記事32面】

— 昨年末にドン・ペリニヨンの醸造最高責任者を退いた。第二の人生を日本酒造りにささげる理由を聞きたい。

「世界中どこにでもあるコメに興味を持った。ブドウは栽培エリアがコメより小さく、ワインを造ることができる土地はさらに限られる。どの国にもあるコメは、世界に通じると考えた。各国に普及している日本食に比べ、日本酒を飲む人は少ない。このアンバランスを解消し、業界を高めたい」
— どのような酒を造るのか。

「革命的な日本酒を造るつもりは全くない。長い時間をかけて日本酒とは何かを考えてきた。これまで80回以上来日し、そのたびに理解が深まった。その上で大切にしたいと思ったのは、日本酒らしい日本酒にすることだ。ただ、プラスアルファはある。それはまだ言えない」

立山で酒造り ジェフロワ氏に聞く

人をつなぐ酒目指す

富山でしかできない

— 28年間にわたりドンペリ醸造最高責任者を務めた経験をもつ生かせると思うか。

「きれいなものをつくるという長年の目標はシャンパン、日本酒とも変わらないう。思い浮かんだ夢を追う」

求めてきた。今回のプロジェクトはゼロからのスタートになる。歩きながら学ぶことが多いだろう。多くの人と共に歩む長い旅になる。人間関係を大切にしながら、人と人をつなぐハートモニーのある酒を目指す」



リシャル・ジェフロワ
フランス・シャンパーニュ地方でワイン醸造を営む家系の生まれ。1982年に医学博士号を取得した後、国立

醸造学校を84年に卒業。90年からドン・ペリニヨン醸造最高責任者を務め、2018年12月末に退任した。65歳。

新ブランドに意欲

白岩会長・社長来社

日本酒メーカーの白岩

(富山市)の会長を務める

ジェフロワ氏とリシャル・

— なぜ酒造りの地に富山を選んだのか。

「山を背に日本海を望む特別な風景があった。落ち着いた場所であり、強い印象を受けた。何度も訪れるうちに人の温かな心、支えに接し、このプロジェクトは富山でしかできないと強く思うようになった」

— 日本酒をどう捉えて世界展開を進めるのか。

「日本酒は日本の魂であり、文化の一つだ。新たなブランドをつくり、世界中に発信することはわれわれの誇りでもある。目標の輸出比率は80%だ。和食と合う酒にするのはもちろん大事だが、他の料理とも楽しめる酒を目指す。国内外の日本人シェフとコラボレーションして広めたい」

(聞き手 経済部・池亀慶輔)

アントワン・ピカール社長が6日、北日本新聞社を訪れ、「新たなブランドをつくりたい」と意欲を示した。

モエ・ヘネシー・ルイ。

ウィトン(LVMH)ジャパン(東京)のノルベール・ルレ社長、シェフの和久田哲也氏、樹田隆一郎樹田酒造店社長ら関係者が同行した。

富山県立山町

・「グリーンツーリズムの取り組み」について

視察地 グリーンパーク吉峰

視察日 令和2年10月28日

立山町民泊推進協議会代表理事、島雅啓氏より説明を受け施設を見学させていただきました。冒頭 GOTO キャンペーンの影響についてお話しいただいた。石川県では有名な宿泊所2か所の二人勝ち。伊東市では5室1泊5万円の施設が来年1月まで予約でいっぱい。経営史上最大の利益を出している。ここ、富山健康の森グリーンパーク吉峰は、1番最後に選ばれており利用客増は30%に届きません。(株)たてやまが指定管理施設として立山町が出支しています。この2つの施設を中心にして、まちに人を呼び込む計画です。自己紹介の中でトップツアー（現東武トップツアーズ）からヘッドハンティングを受け、(株)たてやまの代表取締役役に就いているとのこと。国に外部専門家（地域力創造アドバイザー）制度が1市町村当たり年間500万円、3年間利用できるのもこれを使いグリーンツーリズムや農家民泊などの企画をされ、専門職に就かせた方が責任を持った仕事ができますと資料の提供を受けた。

グリーンパーク吉峰の敷地は県と立山町が半分ずつ所有している。常願寺川から運んだあぶら石の巨石を使い、温泉施設を作りました。温泉の利用者は10万人から14万人に増えており、利用料金は、600円利用者増は徹底した風呂の掃除にあると思います。ホスピタリティを大切にしており利用者は立山町民3割、富山市民4割、その他となっています。立山アルペンルートは、4月15日から11月30日までで山に入り下山、これらの利用者もあります。7月が65%、8月が70%、9月が70%強、10月が80%を超え利用者が戻ってきているとのこと。立山町では他に宴会のできる施設がなく、この施設を使っているが現状料理部門の利用はありません。雇用調整助成金1000万円をいただき、職員50名、年間人件費1.5億円にあてているとのこと。アルペンルートは、6カ月で100万人来るが立山町の利用はほとんどない。これは宿泊施設を持っていないこと、北陸新幹線を使った新しい旅行案が出来るのではと農家民宿を立ち上げた。1軒4人泊80農家が必要である。旅行会社からは200名の利用が可能としてと、立山町との関係人口を増やそう、利用者には、ここが私の田舎なんだろうと思ってもらえるよう努力をしていますとまとめられました。

